

松下由美さん(映画プレゼンター)おすすめ

冬の映画

それぞれの学校で

『型破りな教室』(公開中)
 故郷の小学校に赴任した教師フアレス。そこには政府が設置を約束したコンピュータ室があるはずだったが…。

映画の舞台は、2011年、アメリカ国境に近いメキシコのマタモロスの小学校。麻薬戦争に貧困：フアレスが受け持つ6年生の半分以上が卒業を危ぶまれていたが、校長も巻き込んだ「型破りな」授業で児童たちは学ぶ楽しさに目覚めていった。困難を乗り越え、迎えた国家試験の日…と書くような感動話のようだが、実話に基づいている。クリストファー・ザラ監督



『型破りな教室』 ©Pantelion2.0, LLC

督いわく「既存の公教育は帝国主義的。従順な奴隷を育成し、退屈な授業を乗り切る鍛錬の場」と。兵士や労働者確保のツールに利用されることもあるが、本来、教育は自ら考え変革を促すものであることが伝わってくる。

主演のエウヘニオ・デルベスは南米の大スター。一部過酷な描写もありながら、子どもたちの演技が光る本作は小学校高学年以上にもおすすめ。

『小学校〜それは小さな社会〜』(公開中)
 東京の公立小学校の一年を追ったドキュメンタリ

「日本人」の定義は、日本の公立小学校に通った人」とは、山崎エマ監督の



『小学校〜それは小さな社会〜』 ©Cineric Creative / NHK / Pystymetsä / Point du Jour

弁。本作の英題『The Making of a Japanese (日本人の作り方)』のごとく、小学校は日本の精神と行動の養成所でもある。裏を返せば、暗黙のルールを理解しないと生きづらい社会、とも言える。

監督は、「英国人と日本人の両親を持つ、自身の『強み』はすべて、大阪で過ごした公立小学校時代に学んだ『責任感』や『勤勉さ』などに由来している」と説く。同時に、「集団の中の協調性は日本が誇る強さであると同時に、もろ刃の剣である」といった教育学者の発言も映画の中に挟んでいる。

教師が疲弊している今のままでは、公教育の美徳は持続不可能である。映画の先生方のような質を享受できるのか憂うが、人への投資に舵を切ることが必須である。本作では成長を遂げ達成感に満ちた子どもたちが見事に捉えられ、教職の魅力が余すところなく伝わ

る。150日延べ4000時間という撮影側の忍耐と学校側の協力に感服する。

私の道を生きたる



『ブラックバード、ブラックベリ、私は私』 ©2023 ALVA FILM PRODUCTION SARL - TAKE S FILM LLC

『ブラックバード、ブラックベリ、私は私』(1月3日公開)
 ベストセラーの映画化である本作の主人公は48歳。ジョージアの小さな村で一人、日用品店を営むエテロは両親と兄をみとった。今まで男性経験のない彼女にあからさまな嫌味をいう暇人やさまざまな女性に囲まれながら、ブラックベリジャム作りなど一人の時間を楽しんでいた。しかしあるきっかけで、生を確かめるかのように衝動的に男性と肉関係を持ち…。

『タッチ』(1月24日公開)
 50年前にロンドンで留学生だったクリストファーは、はずみで日本料理店で働くことになる。異文化と食に魅せられたが、一番惹かれたのは店主高橋の娘、ミコだった。しかし二人の関係を知らなかった高橋は、ミコを連れて忽然と姿を消す。世界がコロナ禍に入らんとする2020年。初期の認知症と診断され、「やり残したことがあれば、できるうちに」と医師に告げられたクリストファーは、レ

イキャピクのレストランを閉め、アイスランドを出発しロンドン経由でミコの故郷、広島へ旅立つ。日本被団協がノーベル平和賞を受賞した。本作の原作者であるオラフ・オラフソンと脚本を共同執筆したバルタザール・コルマウクル監督は、本作で被爆者を取り上げるには責任感を持ち真摯に向き合い敬意を払いながらも、アイスランド気質で問題から目をそらす描き切ることを心がけたと語る。長年差別に苦しんだ人々に救いを差し伸べるようでもあり、かたくなであることや偏見の愚かさも提示するラブストーリー。同時に、国外の承認や言及なくして被爆者救済や核兵器禁止条約批准の議論が発展しない現状を改めて考えさせられる。

まつしたゆみ 日本と海外で育ち教育を受ける。現在は教育やメディアのコンサルタント、大学講師として映像／多様な文化共生に関わる授業を行う。映画祭や映画宣伝の司会・通訳・執筆、また映像製作に関わる。 <https://x.com/MatsushitaYumi>



アルフォンソ・キュアロン監督のトークを通訳する筆者。2024年11月、東京国際映画祭で



『TOUCH / タッチ』 ©2024 RVK Studios

アルフォンソ・キュアロン監督のトークを通訳する筆者。2024年11月、東京国際映画祭で

イキャピクのレストランを閉め、アイスランドを出発しロンドン経由でミコの故郷、広島へ旅立つ。

本作で被爆者を取り上げるには責任感を持ち真摯に向き合い敬意を払いながらも、アイスランド気質で問題から目をそらす描き切ることを心がけたと語る。

文化情報 美術

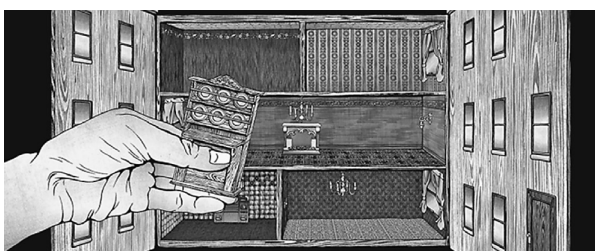
■阪神・淡路大震災30年 企画展
 1995.11.20.25 30年目のわたしたち

阪神・淡路大震災から30年の今年、兵庫県立美術館で、6組7名のアーティストを招聘してのグループ展が開かれている。

1995年から2025年まで30年の間に、アメリカ同時多発テロ(2001年)、東日本大震災(2011年)、さらにウクライナ、ガザでの戦争が続くなど、世界は自然災害と紛争に見舞われてきた。災間を生きたわたしたちは、どんな希望を見出すことができるのか…。

出展作家は、日本の伝統的な木版画の色彩を思わせる手描きアニメーションで、現代社会に潜む問題をシュールに表現してきた東芋(右)、戦争や震災の傷跡が残る日本や世界各国の土地やものに宿る様々な記憶を詩情豊かな写真として発表している米田知子(左)はじめ、國府理、田村友一郎、森山未來、梅田哲也、やなぎみわ。インスタレーションやパフォーマンス、立体など多彩な作品と出会う。兵庫ゆかりの作家や世界に知られるアーティストと鑑賞者が集う場を作り、今それぞれに生きる「私たち」こそ「希望」というメッセージを送ります。

参考：東芋《doleful house》2007年 兵庫県立美術館蔵 ©Tabaimo/Courtesy of Gallery Koyanagi



参考：東芋《doleful house》2007年 兵庫県立美術館蔵 ©Tabaimo/Courtesy of Gallery Koyanagi



米田知子『源流、淡路島』 1995年 国立国際美術館蔵 © Tomoko Yoneda/Courtesy of Shugoarts

◇会期：～3月9日(日) / 開館時間：午前10時～午後6時 入場は閉館30分前 / 休館日：月曜日(ただし1月13日、2月24日開館、1月14日と2月25日は休館)、12月29日～1月3日 / 入館料：一般当日1600円他 / 会場：兵庫県立美術館(阪神岩屋駅徒歩8分、JR神戸線灘駅南口徒歩10分) / 問合せ：TEL078-262-1011